



Title	ピーター・シンガーとWhy be Moral? 問題
Author(s)	杉本, 俊介
Citation	応用倫理, 6, 35-50
Issue Date	2012-10-01
DOI	10.14943/ouyourin.6.35
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/60904
Type	bulletin (article)
File Information	no6_03sugimoto.pdf



[Instructions for use](#)

ピーター・シンガーと Why be Moral? 問題

杉本俊介 (京都大学)

要 旨

本論文は、ピーター・シンガーが「なぜ道徳的であるべきか」(Why be Moral?) という問いに十分に答えているかどうかを検討する。この問いは誰がどう答えたかは知られていても、それが十分な答えかどうかはあまり明らかにされていない。そこで本論文では、シンガーの答えを取り上げ、彼の回答が Why be Moral? という問いに対する十分な答えであるかどうかを検討したい。

本論文のおおまかな流れは以下のとおりである。まず、Why be Moral? 問題の概要を示すとともに、そのなかでのシンガーの答えがどのように位置づけられてきたかを確認する。次いで、従来の解釈と異なり、シンガーは〈あらゆる人にとって道徳的であるべき理由を与えようとはしていない〉ことを確認する。彼がどうしてこのようなスタンスをとるかについても説明を与える。これに対しては、実際シンガーは道徳を気かけない人々を説得しようとしているのではないかという反論が挙げられるだろう。一見すると「なぜ道徳的でなければならないか」という問いに答えられないことを認めているにもかかわらず、我々に道徳的になるように要求することは矛盾した態度であるように思われるからだ。最後に、この反論を検討する。

Peter Singer and the “Why be Moral?” Problem

Shunsuke SUGIMOTO (Kyoto University)

In this paper, I will discuss Peter Singer’s answer to “Why be Moral?”. There have been many debates regarding the “Why be Moral?” problem. It is, however, still unclear whether at least one answer is correct. I take up and examine Singer’s argument.

Firstly, I will provide a brief overview of the literature on the Why be Moral? problem, and place Singer’s contribution within the literature. Secondly, I claim that Singer’s argument from a meaning of life does not intend to provide everyone with the reasons for acting morally, as opposed to the standard interpretation. His 1973 article supports my claim. However, in fact, Singer requires us to be moral, which is an apparent contradiction to my interpretation. Lastly, I explain why it is not a contradiction.

1. はじめに

本論文は、ピーター・シンガーが「なぜ道徳的であるべきか」(Why be Moral?)という問いに十分に答えているかどうかを検討する。Why be Moral? 問題では誰がどう答えたかは知られていても、それが十分な答えかどうかは明らかになっていない。漠然と全体的に失敗であるとは知られていないのが現状である。伊勢田哲治の『動物からの倫理学入門』からもその様子が見えてくる。

「哲学の歴史の中では、ここ [= Why be Moral? に対するゴティエの答え] をさらに乗り越えるためのいろいろな議論が提案されてきた。たとえば「自分の利益」の中に、「自己実現」とか「生きがい」とか「生きる意味」とかを含めてゆくと、共感というルートを通らなくとも人助けが自分のためになるという議論を組み立てることができる。(中略) しかし、あらかじめことわっておけば、それとてもあらゆる人にとって道徳の理由を与えるようなものとはなっていない。」(伊勢田 [2008] 176、括弧内引用者)

後述するように、この曖昧な現状を改める必要があると私は考える。そのため、本論文では、シンガーの答えを取り上げ、それが Why be Moral? に対する十分な答えであるかどうかを検討したい。

シンガーの答えは、この問いに対する数多くある答えのひとつにすぎない。それでも、シンガーの答えをまず取り上げて考察すべき理由が三つ挙げられる。第一に、この問題では「道徳的」(moral) という語で意味することをはっきりさせることが最重要である。この点で、シンガーは道徳の特徴づけに関しても、その具体的な諸要求に関しても明確である(本稿第2・3節)。第二に、この問題に答えるために、論者たちは道徳を気につけないアモラリスト(amoralist) と対峙しなければならない。当然、こうしたアモラリストが本当に存在するかどうか争点になってくる。しかし、シンガーの言う意味での「道徳的」要求に対しては、それらを気につけないアモラリストの存在は自明であるように思われる。それは、肉を食べ、第三世界の飢餓に注意を払わず、環境の破壊を進めてきた(少なくとも許してきた)、我々の大半である¹。第三に、シンガーの答えと言われているものは、現在提案された答えのなかで、比較的最近のものであり、有力視されている答えのひとつである²ので検討する必要がある。

本論文では、まずシンガーの答えだと言われているものが彼の本当の見解ではないことを示す。そして、彼自身はあらゆる人にとって道徳的であるべき理由などないと考えていることを確認する。シンガーはそうのように考える根拠を示していないが、彼の1973年の論文から彼がなぜそのように考えるのかを明らかにする。

シンガーが実はあらゆる人にとって道徳的であるべき理由などないと考えているという点に対して、次のような反論がなされるかもしれない。すなわち、実際シンガーは道徳を気につけない人々を説得しようとしているのではないかと。確かに、「なぜ道徳的でなければならないか」とい

1 以下、傍点はすべて筆者による。

2 たとえば、伊勢田 [2000] 64-65、伊勢田 [2008] 176。

う問いに答えられないことを認めているにもかかわらず、我々に道徳的になるように要求することは、一見すると矛盾した態度であるように思われる。第4節でこの反論を検討する。

本論文のおおまかな流れは以下のとおりである。まず、Why be Moral? 問題の概要を示すとともに、それに対するシンガーの答えがどのように位置づけられてきたかを確認する（第2節）。次いで、従来の解釈と異なり、シンガーはあらゆる人にとって道徳的であるべき理由を与えようとはしていないことを確認する。彼がどうしてこのようなスタンスをとるかについても説明を与える（第3節）。さらに、上記の反論に対して応答する（第4節）。

2. Why be Moral? 問題におけるピーター・シンガー

そもそも Why be Moral? 問題とは何か。この問いは、奇妙な問いである。本論文では以下の三点に注意する。

第一に、ここでの「道徳的である」が「我々がすべきことをする」ことを意味するならば、この問いは「なぜ我々がすべきことを我々がすべきか」という無意味な問いになってしまう。しかし、この定式化は多義性の誤謬（equivocation）を犯している。「なぜ我々がすべきことを我々がすべきか」を問う場合、前者の「べき」と後者の「べき」はふつう異なる意味で使われている。前者は道徳的な意味で、後者は道徳的でない意味で使われているのだ。

第二に、この問いには主語がない。それは、「なぜ我々は道徳的であるべきか」と「なぜ私は道徳的であるべきか」の異なるレベルの問いを同時に扱うためだからだとされる。前者は集団全体が道徳的であるべきであるかどうかを、後者は道徳的であるべき集団の中で私が知られることなく不道徳なふるまいをしてはならないかどうかを問うていると区別される³。

第三に、この問いは「なぜ道徳的であるか」という問いとして解釈されることがあることに注意したい。我々が時として道徳的であるのは疑いない事実である。この事実の説明がしばしば Why be Moral? という名のもとに求められてきた。しかし、本論文では道徳的であるべきことの価値を問題にする。

こうした Why be Moral? 問題は、プラトンの『国家』における「ギュゲスの指輪」に遡ることができるほど古い問題である。それはまた、哲学だけでなくシェークスピアの『マクベス』においてダンカン王の暗殺に躊躇するマクベスの葛藤にも見られる問いでもある。哲学・文学を通して数々の応答が長いあいだ試みられてきたが、本論文では代表的な答えを紹介するにとどめる⁴。

第一は、道徳的であるほうが実は合理的だという解答である。この種の解答が正しいかどうかは、「合理性」が意味することに依拠している。それが、道徳を「理性的な行為者であれば誰でも行為の普遍的に妥当な原則として認めるだろう」という意味ならば、この解答は正しくない。誰もが道徳的だと思わない「すべての者は私の利益になるように行為せよ」という利己主義的な原則も普遍的に妥当だからである。一般にこの意味での普遍的妥当性から道徳がもつ普遍化可能性は導かれぬ。

3 これらの区別は、カイ・ニールセンとデイヴィッド・ゴティエによって同じ時期になされている (Nielsen [1970] 751, Gauthier [1970] 175)。

4 Why be Moral? 問題の代表的な応答を概観するのに、たとえば Hospers [1961] Ch.1 と伊勢田 [2008] 第4章が参考になる。

第二は、道徳的であるほうが自己利益や欲求にかなうからだという解答である。この種の解答に持ち出されるのが、共感や良心である。共感を通して我々は他人の利益を自己の利益にすることができる、などの議論である。しかし、こうした解答も共感や良心に欠けた人（サイコパスなど）がいる事実が反例になる。

以上に挙げたタイプを、じつはシンガーは自身の修士論文「なぜ私は道徳的であるべきか」(Singer [1969]) のなかで検討している。彼の結論も、以上に挙げたタイプの答え方ではこの問いに答えられないというものである。

ここで、シンガーがなぜ Why be Moral? 問題にこだわるのかを説明したい。シンガーは、著書『動物の解放』(Singer [1975]) を出版して以来、世界的な動物権利運動を導いてきただけでなく、発展途上国への援助、難民の支援、自発的安楽死の法制化、野生の自然を保護する運動などに、哲学者・倫理学者としてのみならず、活動家として参加していった。彼は、二〇〇五年の『タイム』誌において世界で最も影響力のある百人のうちのひとりに挙げられている。

しかし、彼の主張の多くは、我々の道徳直観に反するものである。たとえば、論文「飢餓・富裕・道徳」では、発展途上国への援助は我々にとって義務であり、我々の収入の一部を寄付するように要求する (Singer [1972])。また、『動物の解放』や『実践の倫理』では、人間と同様にその他の動物も道徳的配慮の対象であり、種差別をすべきでないという立場から、我々にベジタリアンになるように要求する (Singer [1975] Ch.4; Singer [1979a] 54-57)。さらにまた『グローバリゼーションの倫理学』では、国家の指導者たちが自国民の利益に絶対的優先権を与えてはならないと要求する (Singer [2002a] 4)。

これらの諸要求は彼が説く「利益に対する平等な配慮の原理」(The principle of equal consideration of interests) から一貫して導かれている (Singer [1979a] 19)。この原理は、「道徳を考慮するさいに、我々が、自分の行動に影響される全員の同様の利益に等しい重みをおく」ことを要求する (*Ibid.*)。たとえば、自分がとりうる行動が X と Y にだけ影響を与え、Y が得る利益よりも X が失う利益のほうが大きければ、この原理はその行動をとるべきではないことを要求する。ここで言われる「同様の利益に等しい重みをおく」とは、その利益が誰の利益であるかにかかわらず配慮せよという意味である。しばしば、この原理は功利主義と混同されるが、シンガー自身によれば、これは功利主義特有の原理ではなく、倫理的判断の「普遍性」を認めるかぎり、義務論やそれ以外の立場とも (実存主義でさえ) 両立可能だとされる (*Ibid.* 10-11)。たとえば、『生と死の倫理: 伝統的倫理の崩壊』で彼はこの原理から新しいタイプの義務論⁵を展開する。それは「1. 人命の価値が多様であることを認めよ 2. 決定したことの結果に責任をもて 3. 生死に対する個人の欲求を尊重せよ 4. 望まれた子どもだけを産め 5. 種の違いを根拠に差別するな」という新しい戒律の提案である (Singer [1994] 189-206)。要するに、功利主義を支持するにせよしないにせよ、我々がひとたび道徳にその普遍性を認めるならば、シンガーが説く要求を受け入れざるをえない、とシンガーは論じる。

こうしたシンガーの主張を受け入れて、寄付を始めたたりベジタリアンになったりする人も多い。

5 ヘアの二層理論が「カント主義的功利主義」(Kantian Utilitarianism) と呼ばれるかぎりでは、シンガーによる「新しい戒律」を義務論と呼んでも構わないだろう。ただし、C.D. ブロードによる本来の「義務論的」(Deontological) の定義は「義務の諸概念こそ根本的であり、価値の諸概念はそれらによって定義される」(Broad [1930] 278) ことなので、この意味ではシンガーの戒律は「義務論的」でない。

しかし、それでも我々の大半は自分たちの日常を考え直してはいないように見える。シンガーにとって、これこそが Why be Moral? 問題である。

「読者のなかには、こうした結論を受け入れた結果、ベジタリアンになる人や、絶対的貧困を減少させるためにできるだけのことをする人も出てこよう。我々の結論に同意できない人もいるだろう。(中略)しかし、第三のグループもまたありうる。これに含まれるのは、前章まで行なわれた倫理的な議論に何も間違いを見いださないのだが、それにもかかわらず自分たちの食生活を変えず、海外援助への自分たちの寄付のありかたを考え直そうとはしない読者である。この第三のグループのなかには、単に意志が弱いだけの人もいるだろうが、それ以外に、次のようないっそう実践的な問いに対する解答を求めている読者もいるだろう。それは、もし倫理の結論がこれほど多くを我々に要求するのなら、そもそも倫理などというものを我々は気にしなければならないのか、という問いである。」(Singer [1979a] 201)

こうした懸念から、シンガーは新しいタイプの答えを模索することになる。しかし、シンガーが Why be Moral? 問題に長いあいだこだわってきたことは従来のシンガー研究でも注目されていない⁶。そこで『我々はどう生きるべきか』の冒頭において彼が自分の取り組みを回顧する部分を紹介し、彼の Why be Moral? 問題に対する関心の強さをあらためて強調したい。

「修士論文を書いて以来、私は「なぜ倫理的に行為すべきか」という問いについて『実践の倫理』の最終章で書き、また倫理と利己性というテーマについては『広がりゆく輪』でふれてきた。倫理と自己利益との間の結びつきにもう一度目を向けてみると、今の私は、他の学者たちの研究や著作に頼るばかりでなく、実際の経験という堅固な後ろ盾に頼ることができる。なぜ誰もが道徳的に、ないし倫理的に行為すべきなのかと問われたなら、初期の論文よりも大胆で積極的な答えを出すことができる。倫理的な生き方を選び、そうして世界に影響を与えることができた人たちをあげることができる。この人たちは、そうすることによって、多くの人々が見つけることをあきらめていたような意義を自分の人生に与えたのである。」(Singer [1993a] viii)

引用から明らかかなように、Why be Moral? に対して、シンガーは道徳的なふるまいがその人の人生に意義を与えるからだと答えているように見える。そのため、従来、シンガーは Why be Moral? 問題に人生の意義に訴えて応答していると解釈されてきた。「ピーター・シンガーの場合は、『なぜ道徳的であるべきか』を論ずるにあたって、『人生の意味』に関する議論を導入する。」(伊勢田 [2000] 64)。「なぜ人は道徳的であるべきかに関するシンガーの説明は、本質的に倫理的な生き方を選ぶことがその人に人生には意味があるという感覚 (a sense of meaning) を与え、それに

6 シンガー研究の代表的な文献として、Jamieson [1999]、山内・浅井 [2008]、Schaler [2009] が挙げられる。しかし、シンガーの Why be Moral? への長年の関心に言及したものは私の知るかぎりヘルガ・クーゼとヒュン・ヘックスマンのみである。「246 頁もの大部の学位論文でシンガーは、「なぜ私は道徳的であるべきか」という問い——それは、以降も長い年月彼の心を占めることになる問い——に取り組んだ。」(Kuhse [2002] 9)。「彼の修士論文から、『実践の倫理』、『広がりゆく輪』、さらに最近の『我々はどう生きるべきか』までの著作を通して、シンガーは「なぜ倫理的に行為すべきか」という問いに答えようとしてきた」(Höchsmann [2002] 72)。

よってより大きな幸福へ導くと言う。」(Huemer [2009] 368-369)。

このような従来解釈のもとで、Why be Moral? に対するシンガーの答えは次のように批判される。「ただ、WBM [= Why be Moral?] への答えとして言えば、『人生に意味などいらぬ』あるいは『わたしは自己利益の追求という物語に十分意味を見いだしている』といった反応に対して、この議論はあまりに弱すぎるだろう。」(伊勢田 [2000] 65、括弧内引用者)。「シンガーの見解では、倫理は要求しすぎる。(中略) もし私がシンガーの基準で倫理的にふるまえば、私の人生がひどく不幸なものになるのは明らかであるように思える。(中略) もしシンガーの倫理的な観点を受け入れるならば、私がとる他の選択肢は偽善になってしまう。」(Huemer [2009] 368-9)。

しかし、次節で検討するように、シンガーが Why be Moral? 問題に対して人生の意義に訴えて答えようとしているようには思えない。テキストからは、シンガーがあらゆる人にとって道徳的であるべき理由などないと述べている箇所すら見つけられる。

3. 道徳的であるべき理由はあるか

3.1 従来解釈：人生の意義に訴える

まず、従来解釈のどこが誤っているかを確認する。彼は修士論文において、Why be Moral? 問題が疑似問題でないことを示し、この問題に対して従来なされてきた二つの試み——道徳的であることが合理的であるということを示す試みと、道徳的であるほうが欲求もしくは自己利益を満たすということを示す試み——がともに失敗することを証明する。結論において「なぜ私は道徳的であるべきか」は古くから認められたその重要性にもかかわらず、いまだ答えられていないと論じられる (Singer [1969] 6, 226)。

このような結論は彼にとって満足できるものではなかった。その後書かれた『実践の倫理』では、利益に対する平等な配慮の原理から、種差別に反対し、発展途上国への援助や難民を支援すべきである、あるいは自発的安楽死を法制化すべきであると結論づけた後、先に引用したようにこうした結論を気になければならないのかという Why be Moral? 問題に取り組んでいる (Singer [1979a] 201)。この問題はシンガーにとって自分の主張の説得力を左右する「実践的な問い」なのである。ここで言われるアモラリストとは、『実践の倫理』での主張に説得力を感じつつも、「食生活を変えず、海外援助のための寄付のありかたも考え直そうとしない」我々の大半であるように思える。『実践の倫理』の一章は、そんな我々の多くに向けて書かれている (Singer [1979a] Ch.10)。

その内容は彼の修士論文の内容と似てはいるが、最後に従来にないタイプの解答を指摘している点が新しい (*Ibid.* 216-220)。シンガーはこの解答をもって Why be Moral? 問題に応答していると解釈するのが、従来解釈である。

シンガーによれば、人生に一貫した意義 (a meaning) を見いだすために我々は道徳的であるべきだと主張する (*Ibid.* 218-219)。意義のある人生はただ楽しんでいるだけでは不十分だという。なぜなら、我々は一時の快樂を越えたところに幸福を見いだすからである。では長期的な自己利益を考慮した分別のある利己主義者であればよいのか。シンガーはそれでも不十分であると言う。その例として、『実践の倫理』第二版では、生涯にわたって自己利益を追求し、その追求を「卒業

してしまった」デニス・レヴァインの人生が、第三版では映画『ウォール街』で繁栄と崩壊のサイクルから抜け出せない投資家ゴードン・ゲッコーの様子が挙げられている (Singer [1993b] 333; Singer [2011] 293)。そして、自己利益以外の広い目的として「卒業することのない」道徳に従った生き方が提案される。

ここで注目すべきなのは、シンガー自身はこの解答を「これはどれも推測の域を出ない」(All this is speculative) としていることである (Singer [1979a] 220; Singer [1993a] 332; Singer [2011] 292)。彼はこの提案が正しいことを示そうとはしていないのである。私には、従来の解釈はこの文章を見過ごしているように思われる。

さらに『実践の倫理』初版・第二版の最終章は、彼自身が Why be Moral? 問題に対してどのような立場にいるのかを表している。

「誰も抗えないような道徳的に行為する理由を示すことによっては「なぜ道徳的に行為すべきか」という問いに答えることはできない。倫理的に擁護できない行動が常に不合理なわけではない。おそらく、倫理的基準に著しく違反することに反対する理由をさらに与えるために、法や社会的圧力のサンクションがいつでも必要になってくるだろう。それと同時に、本章で議論してきた問いを十分反省してくれた読者には倫理的観点をとる理由を分かってくれるものと期待している。」(Singer [1979a] 220; Singer [1993b] 335)

この引用の第一文からわかるように、シンガー自身は「あらゆる人にとって道徳的であるべき理由を与えるものはあるか」という問いに対して「ない」と答えている。だからこそ、不道徳な行動をとる人に対しては「法や社会的圧力のサンクションがいつでも必要になってくる」と考えているのである。この箇所に関しても、従来のシンガー解釈で取り上げられることはない。

引用の最後の文が表すのは、シンガーがこの解答こそ正しいと主張しているのではなく、この解答を我々読者に対して推薦しているということである。このような立場をその後のシンガーも持ち続けているように思われる。『我々はどう生きるべきか』でも、「我々はこのより高い倫理的意識が普遍的になることを期待できない。(中略) 既に示したように、推論だけで自己利益と倫理のあいだの衝突を完全に解決することはできないので、理性に訴える (rational) 論証があらゆる理性的な人物を倫理的に行為させるように説得することはありえない」と言う (Singer [1993a] 278)。そして、倫理的な生き方を選んだ人物を例に、こうした生き方を推薦するのである (*Ibid.* viii)。たとえば、動物権利運動家ヘンリー・スパイラが挙げられる (*Ibid.* 260-262)。シンガーの『倫理を行動に——ヘンリー・スパイラと動物権利運動』では、スパイラが道徳的に行動してその人生を最期までいかに有意義に生きたかを紹介している⁷。

「この時期 [= ガンに侵され余命数ヶ月と知った時期]、ヘンリーについて最も注目すべきことは落ち込んだ様子を一切見せなかったことである。彼は「よい人生だった。自分のしたい

7 こうした経緯から、『実践の倫理』第三版の最後は次のように書き換えられている。「それと同時に、本章で議論してきた問いを十分反省してくれた読者にはスパイラが示した倫理的観点をとる理由が分かってくれるものと期待している。」(Singer [2011] 295)。

ことをしてきたし、それを大いに楽しんだよ」と言った。(中略)ヘンリーは、自分がこうした人生を選んできたのは、義務の感覚がそうするのが正しいことだと彼に感じさせているからであるというより、それをするので気持ちがいいからだということを強調しているが、彼を動機づけているのは疑いなく価値があることをしているという強い感覚である。」(Singer [1998] 195-197, 括弧引用者)

強調すべきは、シンガー自身は、こうした道徳的な生き方を「あらゆる人にとって道徳的であるべき理由」にしているわけではなく、読者に示すことで推薦しているだけだということである。それゆえ、従来の解釈は誤りだと私は考える。

3.2 1973年の論文の重要性

しかし、シンガーはなぜ、あらゆる人にとって道徳的であるべき理由を与えるものはないと考えるのだろうか。この見解を擁護する議論は、彼の修士論文での結論部と『実践の倫理』での「誰も抗えないような道徳的に行為する理由を示すことによって「なぜ道徳的に行為するのか」という問いに答えることはできない」という部分にはない。『我々はどう生きるべきか』でも、その理由として、自己利益と倫理のあいだの衝突を推論のみで完全に解決することはこれまでできなかったことが、ベトナム、ミル、シジウィックを例に指摘されているだけである (Singer [1993a] 227-229)。

そこで、角度を変えて、シンガーが彼の主張の理論的根拠の多くを彼の指導教員である R.M. ヘアに負っている点に注目したい。

ヘア自身は、シンガーのように「利益に対する平等な配慮の原理」というかたちで提示していないものの、後述する普遍的指令主義と呼ばれるメタ倫理学上の立場から、功利主義的な考えと義務論的な考えの両方を取り込んだ「二層理論」を支持している (Hare [1981] 35-43)。二層理論では、直観レベルで、一見自明な (prima facie) 原則に従うことが要求されるが、これらの原則のうちどれに従うべきかという選択と、これらの原則が衝突したときに解決するレベルとして功利計算する批判レベルが別に用意されている。では、あらゆる人にとってこの二層理論型の功利主義に従うべき理由を与えるものはあるか。

この点に取り組んだのが、1973年のシンガーの論文「である一べし問題と『道徳』の定義についての論争のトリビアルさ」である (Singer [1973])⁸。この論文がシンガー研究のなかで Why be Moral? 問題の文脈において引き合いに出されたことは私の知るかぎりない⁹。しかし1973年のこの論文こそ、シンガーが、あらゆる人にとって道徳的であるべき理由を与えるものはないと考える根拠を示しているものである。以下、その応答をこの論文の議論に沿って見ていくことにしよう。

この論文において、シンガーは「道徳」の定義について提案されてきた三つのアプローチを批判している。一つめは、「道徳」を(それが理解可能で自己矛盾していないかぎり)その形式と内容に関して中立的に定義する「中立主義」と呼ばれる立場である(代表的な中立主義者として

8 ヘアはシンガーとは別の応答を試みている (Hare [1981] 188-198)。

9 1973年のシンガーの論文「である一べし問題と『道徳』の定義についての論争のトリビアルさ」について別の角度から考察したものとして、田村 [1999]、Smith [1999] がある。

D.H. モンロが挙げられている)。中立主義にとって、ある原理が「道徳的」であるのは、それが特定の内容をもっているからではない。「一時間ごとに手を鳴らせ」も道徳原理になりうる。また、それが普遍化可能であるなど特定の形式をもっているからでもない。ある原理が普遍化可能 (universalizable) であるとは、その原理のなかに「私」や「あなた」が含まれず普遍的原理として立てることが可能であることを意味する。それゆえ、中立主義によれば、「すべての人は私の利益になるように行為せよ」という利己主義的な原理も道徳原理になりうる。中立主義にとって、「道徳的」原理はただ優越的でありさえすればよい。ある原理が優越的 (overriding) であるとは、その原理が別の原理と衝突する場合、常にその原理が優先されるという意味である。

二つめのアプローチは、「道徳」をその内容と形式から定義する「記述主義」と呼ばれる立場である。この名称はヘアによって使われたものであり、自然主義と直観主義をまとめて指す。記述主義によれば、ある原理が「道徳的」であるのは、それが特定の内容と形式をもつからだとされる。具体的には、それが快・苦について言及した内容をもつことや、普遍化可能性という形式をもつからだという。

シンガーは、この論文において、中立主義と記述主義の対立は「実践的意味」(practical significance) のある問題ではないと論じる (*Ibid.* 22)。一方で、中立主義は「すべての人は私の利益になるように行為せよ」という道徳原理を立てるかもしれない。しかし、「それはあなたの原理であって私の原理でない。なぜ私が気にしなければならないのか」と応答する者を説得できない。

他方で、記述主義は「この悲惨な事実を見よ。誰であれ、苦しみを減らして、快を増やすべきである」という道徳原理を立てるかもしれない。しかし、「そうした事実は認めよう。しかし、なぜ私が気にしなければならないのか」と応答する者に対して、道徳の定義からその理由を与えることはできない。

シンガーが指摘する問題はこうである。中立主義は、道徳に優越性だけを認め、固有の内容と形式を認めない立場である。ひとたび道徳判断が下されれば、そうすべき理由を我々は見いだすことができる。しかし、道徳に固有の内容と形式を認めないせいで、我々にとって共有できる「道徳的」事実が存在しない。たとえば、この私が不利益を被っているという事実も中立主義の意味で「道徳的」事実ではあるが、それはあらゆる人にとって共有できる「道徳的」事実ではない。そのため、あらゆる人が「すべての人は私の利益になるように行為せよ」という原理を「道徳的」原理として立てることはできない。〈事実〉と〈道徳判断・行為の理由〉のあいだにギャップができてしまう。しかし、記述主義のほうも、道徳に固有の内容と形式を認めるが、そのせいで行動する理由を我々が見いだすことができない事実まで、道徳判断を認めざるをえなくなる。今度は〈事実・道徳判断〉と〈行為の理由〉のあいだにギャップができてしまう。たとえば、記述主義者にとって、動物実験や工場畜産で数多くの動物が苦しんでいるという事実が、たとえ「道徳的」事実であっても、我々が何かをなす理由である必要はないことになってしまう。

それでは、中立主義と記述主義の利点をうまく合わせられないか。シンガーは、こうした三つめのアプローチとして、ヘアの「普遍的指令主義」を挙げている (*Ibid.* 26n5)。普遍的指令主義によれば、その原理が「道徳的」原理であるためには、普遍化可能性と優越性の両方の特徴をもたなければならないからである¹⁰。

10 このシンガーによる特徴づけは正確ではない。普遍的指令主義によれば、その原理が「道徳的」原理であるためには、普遍化

しかし、こうしたヘアの立場は中立主義に対しても記述主義に対しても改善にはならないと、シンガーは述べる (*Ibid.* 23)。まずこれは、中立主義者を悩ませていた人物、「すべての人は私の利益になるように行為せよ」という普遍化できない優越的な原理を立てる人物を説得しないという。普遍的指令主義は形式に関しては中立的でないが内容に関しては中立的であるため、こうした人物に対して「あなたの『道徳的』原理は普遍化できない以上、本当は道徳的原理でない」と言うだけだからである。そのため、〈事実〉と〈道徳判断・行為の理由〉のあいだのギャップは埋められない。言い換えれば、普遍的指令主義者が言う「道徳的」事実はあらゆる人にとって共有できる「道徳的」事実ではない。さらに、ヘアの立場では記述主義の問題点を解決できないという。シンガーによれば、たとえある判断が普遍化可能であるように下されていたとしても、その判断が快・苦について関心がない人物を動機づけないことがありうることをヘアは認めざるをえないからである (*Ibid.* 25)。たとえば、一人前になって他の人に頼らないという理想を抱く人物にとって、たとえ他の人々が多少苦しんでいても高級車を購入すべきであるという判断は普遍化可能でありうる。これがたとえヘアが言う意味での「道徳的」判断であろうと、我々に他の人々が多少苦しんでいても高級車を購入すべき理由を与えないであろう。それゆえ、今度は〈事実・道徳判断〉と〈行為の理由〉のあいだに依然としてギャップが残ってしまう。

以上から、シンガーはヘアの理論では、あらゆる人にとって道徳的であるべき理由を与えるものはないと考えている。そしてシンガーは、道徳判断が普遍化可能性・優越性（・指令性）をもつというヘアの考えを受け入れている。それゆえに、シンガーもあらゆる人にとって道徳的であるべき理由を与えるものはないという立場にコミットしていることになる。これは、シンガーがなぜあらゆる人にとって道徳的であるべき理由などないと考えているか、を説明するだろう。

4. 理由がなくても人を説得することはできる

4.1 外在主義

これまでの考察から、従来の解釈に反して、シンガー自身はあらゆる人にとって道徳的であるべき理由などないと考えているということが明らかになった。これに対して、シンガーが道徳を気にかけていない人々を説得しようとしているという事実を反論として挙げる人がいるかもしれない。ここまで論じてきたことが正しければ、我々の「なぜそこまでして道徳を気にかけていなければならないのか」という問いに対して、シンガーは「あなたたちの誰に対しても満足のゆく理由はないだろう」と答えるはずである。しかし、彼は我々に種差別すべきでない、発展途上国へ援助すべきである、難民を支援すべきである、自発的安楽死を認めなければならない、野生の自然を保護しなければならない、と多くのことを要求する。これはシンガーにとって矛盾した態度ではないだろうか。彼はあらゆる人にとって道徳的であるべき理由があると本当は信じているのではないか。

以下では、このような疑問に答えたい。これまで Why be Moral? 問題が議論されるとき、「あらゆる人にとって道徳的であるべき理由を与えるものはあるか」という問題と、「道徳を気にかけていない人々（アマラリスト）を説得できるか」という問題が区別されないままに論じられてきた。

可能性と優越性に加えて、指令性をもたなければならないからである (Hare [1981] 24)。ここで、ある原理が指令的 (prescriptive) であるとは、その原理が何かをすべきであるというものならば、それは「それをせよ」という指令を含蓄することを意味する。

しかし、シンガーにとって両者は別の問題であるように思われる。

まず、あらゆる人にとって道徳的であるべき理由を与えるものがあるとしてみよう。その場合、道徳は合理性ないし理性の要求のひとつである。しかし、道徳は合理性ないし理性の要求ではないと考える立場も存在する。それは理由に関する外在主義 (externalism about reasons) と呼ばれる。こうした立場のひとつは、あらゆる人にとって道徳的であるべき理由を与えるものはないが、それでも、あることをすることが道徳的に正しいとひとたび判断されれば、そのことをするように動機づけられなければならない、もしそうでなかったとしたならばそれは意志の弱さなどによってその人の動機づけが打ち負かされてしまったからだと考える。こうした道徳判断と動機づけの必然的な結びつきは、「道徳的に正しい」という判断が人を動機づける感情・情念の表出であるか、あるいは指令性を持っていることで説明される。このような立場は、動機づけに関する内在主義 (internalism about motivation) と呼ばれる。

しかし、シンガーによれば、その人が抱く理想しだいでは、たとえその判断が普遍化可能であり「道徳的」判断であっても、動機づけられないままであることがありうる。この点で、シンガーは理由に関する外在主義者であると同時に、動機づけに関する外在主義 (externalism about motivation) と呼ばれる立場にいる。動機づけに関する外在主義においては、人々が本当に道徳的に判断すれば必ず動機づけられるわけではなく、道徳判断と動機づけにはギャップがある。前節で見たさまざまなギャップに加え、この種のギャップを埋めるためにも道徳判断に外在的であるような手段を使う必要が出てくる。

実際、我々の大半はシンガーの著作を読んで、彼の主張に納得し、書かれていることの実践を道徳的に正しいと判断したとしても、なお実践に動機づけられないアマモラリストである。さらに、我々のなかには、今も飢えで苦しんでいることもたちが数多くいることや集約的畜産システムのなかで絶えず苦しみを与えられながら鶏が育てられているという事実が、こうした苦しみを減らすことが正しいという道徳判断と結びつかない者も数多くいる。事実と道徳判断のあいだにもまたギャップがある。外在主義者にとって、これらのギャップは、「道徳はこういうものである。だから…」という理屈では埋まらない。それを埋めるのは、「法や社会的圧力のサンクション」など道徳判断に外在的な手段である。

そこで、シンガーの立場では、あらゆる人にとって道徳的であるべき理由を与えるものはないとしても、道徳を気にかけない人々を説得することはできると言える。

4.2 シンガーの試行錯誤

シンガーの著作をあらためて読み返してみると、彼がいかに読者を説得しようと試みているかが見えてくる。ここでは、そうした説得手段のうち、(a) 詳細な情報の提示 (b) 道徳直観の掘り崩し (c) 感情への訴え (d) 道徳的に要求されるよりも低い水準の提示、の四つの手段を紹介し、彼の試行錯誤の様子を見てみたい。こうした様子は、彼が外在主義者であることを裏付けている。

(a) 詳細な情報の提示

まず、シンガーは、ある事実がなぜ「道徳的」事実であるのかを示すことで、事実と道徳判断のあいだにあるギャップを埋めようと試みる。以下は『動物の解放』の序文 (1975 年版) である。

「もし読者が本書を注意深く読み、とくに第二章と第三章を熟読すれば、動物の抑圧について、優に一冊の本になる私の知識を共有することになるだろう。(中略) だから私はいますぐに冒頭の文章 (= ヒト以外の動物に対する人類の専制政治は、何世紀にもわたる白人の黒人に対する専制政治に匹敵するものであり、現代の道徳的・社会的問題をめぐる論争のなかで最も重要な問題のひとつである) を額面通りに受け取ることを読者に要求しているわけではない。本書を一読したのちに判断を下してほしいだけである。」(Singer [1975] ix, 括弧引用者)

シンガーはここで、動物たちが苦しんでいるという事実がいかに我々と関係するかを示そうとしている。『動物の解放』の第二章と第三章では種差別の例として動物実験と工場畜産がそれぞれ詳細に紹介されている。シンガーはこの二つに絞った理由を次のように書いている。

「また我々はこれらの行為に関係のないふりをするにはできない。それらのひとつ — 動物実験 — は我々が選んだ政府によって推進されており、費用の多くが我々の払う税金によってまかなわれている。もうひとつ — 食用家畜の飼育 — は、ほとんどの市民が肉を買って食べるというだけの理由で存続が可能である。以上のような理由で私はこれらの特別な形態の種差別を議論の対象として選んだのである。」(Ibid. 22)

動物実験では年間何千万頭、工場畜産では年間何十億頭の動物が苦しんでいるという事実が、納税や食事という我々のごく日常なこととつながっていることを示すことで、シンガーは事実と道徳判断のギャップを埋めようと試みているのである。

(b) 道徳直観の掘り崩し

しかし、我々はいつものように食事をし、動物実験に当てられるかもしれない税金を納めている。我々の多くには、安全なシャンプーを使うために動物実験をすることはある程度許されるし、おいしい食事のためにブタなどが集約的に飼育されることはある程度仕方がないと思われるという道徳直観がある。我々は道徳判断を下す際、自分たちの道徳直観に部分的に依拠することが多い。シンガーはこうした道徳直観への依拠を批判する。

そこで、彼は我々を説得するためにこうした道徳直観・態度を掘り崩そうともする。一つの仕方は、上で述べたように事実の詳細を知らせることである。別の仕方として、彼は我々の道徳直観・態度の歴史的起源を明らかにし、こうした直観や態度のもっともらしさを、歴史上問われることのないまま置かれてきた前提(イデオロギー)として批判する。それが『動物の解放』第5章である。

「そうした態度 [=あまりに深くしみこんでしまっているために、我々がそれを疑問の余地のない真理として受け取っている態度] がいかにひとりよがりなものであるかを、正面攻撃によって突くことは、可能かもしれない。それが、私がこれまでの章でやろうとしてきたことである。もうひとつの戦略は、その歴史的起源を明らかにすることによって現在支配的なものとなっている態度のもっともらしさを徐々に掘りくずそうとすることである。」(Ibid.185、

括弧内引用者)

シンガーはまた、『人命の脱神聖化』で、人間の生命それ自体に特別な価値があるという「人命の神聖性」(the sanctity of human life) を支持する我々の道徳直観を同様の仕方でも批判する¹¹。

「同じことが道徳哲学においてもある。人々は、胎児を殺すのは悪いことでサルやブタを殺すのは正しいことだと確信しており、それに反対する議論を聞いて妥当だと感じたとしても、それ以上にもとの確信が強いのである。(中略)そこで、以下で歴史を紐解くことによって、こうした直観を弱めるように努めてみたい。それによって、人命の神聖性という原理は、かつて広まっていた態度や信仰の遺物とも言うべきものであり、今ではそれを擁護しようとする人などほとんどいないということを受容してもらいたいのだ。」(Singer [2002b] 227)

シンガーは、道徳判断を下す際の道徳直観への依拠にもっともらしさがないと示すことで、事実から道徳判断へのギャップを超えようとしているのである。

(c) 感情への訴え

しかし、何を行なうのが道徳的に正しいのかを判断できたとしても、我々は動かされないかもしれない。道徳判断と行為の理由・動機づけのあいだにもギャップが存在するからだ。それでは、我々を動かすものは何か。それは感情である。シンガーは、彼の著作の多くのなかで感情に訴える。

この点で従来のシンガー研究では、シンガーは感情に訴えない議論を展開しているという解釈が見られるので注意しておきたい(山本[2008] 123-126)。そこで引用される『動物の解放』の序論を見てみよう。

「本書は、「かわいい」動物たちへの同情 (sympathy) を呼び起こす目的で感情に訴えるものではない。私は肉を食べるために豚を屠殺することに対して、馬や犬をこの目的で屠殺することに対するのと同じように激怒しているのである。」(Singer [1975] xi)

この引用でシンガーが注意していることは、たとえば動物愛好家に致死性ガスのテストとして犬を使うのは「かわいそう」だという同情¹²を呼び起こす目的で感情に訴えてはいけないということである。「ラットならばかわいそうではない」という意見がこれまでの動物権利運動を妨げてきたからである。しかし、シンガーは、読者にこの世界の悲惨な道徳的事実に対して何らかの行動を起こさせる目的で怒りという感情に訴えてはいる。以下の引用では、彼がそれを意図的にしていることが示されている。

11 同様のことは『実践の倫理』の新生児殺しの議論でも述べられている。「我々が現在とっている新生児の生命の絶対的保護は、普遍的な倫理的価値というよりも、むしろきわめてユダヤ=キリスト教的な態度なのである。」(Singer [1979a] 125)

12 この文脈で sympathy は、対等な者どうしの「共感」よりも、優位な者(ここでは人間)が劣位な者(ここでは他の動物)に抱く同情や憐れみを指すので、「同情」が適切な訳語であると判断し、邦訳に従った。シンガーは、引用箇所の直前で、そうした訴えは感傷的で感情的な動物愛好家に向けられて使われてきたと述べているからである。

「我々が具体的にどのような態度で動物に接しているか——動物たちが人間の専制政治によってどのように苦しめられているか——を扱う章では、我々の感情をかきたてる記述も出てくるであろう。私が願っているのは、その感情が、現状に対して何らかの行動を起こそうという決意を伴った怒りの感情となることである。」(Singer [1975] xi)

たとえば、シンガーはウサギを使ったドレーズ・テストの残酷さを写真で示し、読者に怒りの感情をかき立てようとする (*Ibid.*160 の挿絵)。

(d) 道徳的に要求されるよりも低い水準の提示

しかし、シンガーが考える道徳は我々の多くに対して過度な要求を迫ってくる。飢餓救済を例にすると、彼は論文「飢餓・富裕・道徳」において、「悪い事態が起こることを防ぐことが我々にでき、それによって同様に道徳的に重要なものを何であれ犠牲にしないならば、我々はそれを道徳的になすべきである」と論じる (Singer [1972] 147)。ここでの「犠牲」の解釈によっては、困窮する人々の経済状況にほぼ近くなるまで我々は自らの生活を犠牲にしなければならない。我々の多くは、こうした過度な要求を聞き、そうすることがたとえ正しいと判断しても、そのような行為を行なうよう動機づけられはしないだろう。

そこで、シンガーは『実践の倫理』において道徳的に要求されるよりも低い水準を読者に提示する。

「こうした反論から導き出されることは、寄付に関するこの基準をおおやけに打ち出すことは望ましくないということである。つまり、絶対的貧困を減少させるために最大限のことをなすには、人々が実際に寄付すべきだと我々が考える額よりも低い基準を打ち出すべきだということである。」(Singer [1979a] 180)

たとえば『実践の倫理』初版で、シンガーは各人に年収の10%だけを寄付するように促す (*Ibid.* 181)。10%程度の寄付では、寄付する人々の経済状況が救済される人々の経済状況にほぼ近くなるほど悪くなることはない。それでも過度な要求だと思われるだろう。実際、シンガーは『グローバル化の倫理学』でその割合を1%にまで下げ、『あなたが救うことのできる命』では1%を最低ラインにし納税者の90%に対して年収の5%以上を要求しない累進的な寄付の方法を提案している (Singer [2002a] 194; Singer [2009] 167)。この方法は最近の『実践の倫理』第三版でも紹介されている (Singer [2011] 214)。

しかし、道徳的に要求されるよりも低い水準を提示することに問題はないのだろうか。それに従うことが本当に道徳的な生き方だと言えるのだろうか。シンガーは、一見すると道徳的に見えない要求を彼が支持する帰結主義の自己消去的 (self-effacing) 性格から、あるいは『実践の倫理』第二版以降では二層理論からそれを正当化する (Singer [1979a] 180-181; Singer [1993] 245-246)。彼の議論によれば、はじめから道徳的に要求される水準を打ち出してしまうと、我々の多くは寄付しようという意欲を失うだろうから、結果として道徳的に望ましくない状態に陥ってしまう。こうした場合に帰結主義は、我々に帰結主義的でない原則に従うように要求する。帰結主義のこ

うした性格は自己消去性と呼ばれ、この性格を道徳的思考の二つのレベルとして理論化したのが二層理論である。それゆえ、シンガーは、彼の立場と矛盾せずに、直観レベルでは道徳的に要求されるよりも低い水準に従うべきだと言うことができる。

以上のようにシンガーは、理論的にはあらゆる人にとって道徳的であるべき理由を与えるものがないことを認めながらも、実践的にはさまざまな手段に訴えて道徳を気かけない我々の多くを説得しようと試みている。これは彼が外在主義をとっているためである。

したがって、事実としてシンガーは道徳を気かけない人々を説得しようとしている点は、シンガー自身があらゆる人にとって道徳的であるべき理由などないと考えていることの反論の根拠にはならないと私は考える。

5. まとめ

本論文は、ピーター・シンガーが Why be Moral? という問いに十分に答えているかどうかを検討した。まず、Why be Moral? 問題の先行研究のなかでシンガーの答えがどのように位置づけられてきたかを確認した。次いで、シンガーは人生の意義に訴えてこれに答えているという従来の解釈と異なり、シンガーはあらゆる人にとっての道徳的であるべき理由を与えようとはしていないことを確認した。彼がどうしてこのようなスタンスをとるかについて、1973年の論文に注目して説明を与えた。さらに、シンガーが道徳を気かけない人々を説得しようとしている点は、彼が外在主義をとることに注意すれば、本論文の解釈に対する反論にならないことを示した。

ここには、Why be Moral? に十分に答えられないまま、なぜ倫理学者が道徳について語り、時には道徳的であるべきだと主張するかという問いに対するひとつの答えが見て取れる。それはシンガーにとって、彼の活動家としての側面がそうさせるのである。しばしば、倫理と倫理学はちがうものだと言われることがある。倫理を教えるとは、倫理を体にしみ込ませることである。倫理学を教えるとは、そうしてしみ込んだ倫理から距離をとってあらためて倫理とは何か、そこにどういう根拠があるかを問う哲学である。シンガーは倫理学者として Why be Moral? に答えはないという結論を出した。だが、その時でさえ、彼は、人生の意義を持ち出し、倫理を説いている。本論文ではシンガーを例にこうした Why be Moral? を問う倫理学者のひとつの姿勢を明らかにした¹³。

文献

- 伊勢田哲治 [2000] 「Why Be Moral on Internet? —— 道徳の根拠付けとインターネットの発展」、『情報倫理学研究 資料集Ⅱ』59-74 頁。
 —— [2008] 『動物からの倫理学入門』名古屋大学出版会。
 田村圭一 [1999] 「義務と行為」、『哲学』、北海道大学哲学会、35 号、77-95 頁。
 山内友三郎・浅井篤編 [2008] 『シンガーの実践倫理を読み解く —— 地球時代の生き方』昭和堂。
 山本栄美子 [2008] 「「倫理的な生き方」を提唱するピーター・シンガーの死生観」『死生学研究』第 10 号、187-206 頁。
 Broad, C.D. [1930] *Five Types of Ethical Theory*, Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd.

13 本稿は、2011 年 10 月 Sixth International Conference on Applied Ethics における口頭発表をもとに加筆・修正したものである。当日、出席された方々には有益な意見を多くいただいた。その発表以降、投稿のためになされた多くの修正に関して、査読者にも謝意を表したい。

- Gauthier, David [1970] "Morality and Advantage," *The Philosophical Review*, LXXVI, No.4, 1967, pp.460-475. Reprinted in his ed. *Morality and Rational Self-Interest*, Prentice Hall, pp.166-180. (本文中の頁はリプリントの方の頁を示している。)
- Hare, R.M. [1952] *The Language of Morals*, Clarendon Press. (R.M. ヘア (小泉仰・大久保正健訳) 『道徳の言語』勁草書房、1982年。)
- [1981] *Moral Thinking: Its Levels, Method and Point*, Oxford University Press. (R.M. ヘア (内井惣七・山内友三郎監訳) 『道徳的に考える』勁草書房、1994年。)
- Hospers, John [1961] *Human Conduct*, Hartcourt, Brace & World, Inc.
- Höchsmann, Hyun [2002] *On Peter Singer*, Wardsworth.
- Huemer, Michael [2009] "Singer's Unstable Meta-Ethics," in Schaler [2009] pp.359-379.
- Jamieson, Dale [1999] *Singer and His Critics*, Blackwell Publishing.
- Kuhze, Helga [2002] "Introduction: The Practical Ethics of Peter Singer," in Singer [2002b] pp.1-14.
- Nielsen, Kai [1970] "Why should I be moral?" *Methodos*, Vol.15, 1963, pp.275-306. Reprinted in Wilfrid Sellars and John Hospers (eds.), *Readings in Ethical Theory*, 2nd edition, Prentice Hall, pp. 747-768. (本文中の頁はリプリントの方の頁を示している。)
- Schaler, Jeffrey A. [2009] *Peter Singer under Fire*, Open Court.
- Singer, Peter [1969] "Why Should I be Moral?" Masters Research Thesis, Department of Philosophy, The University of Melbourne. (<http://repository.unimelb.edu.au/10187/8857> から入手可能。2012年9月6日確認。)
- [1972] "Famine, Affluence, and Morality," in *Philosophy and Public Affairs*, 1, pp.229-43. Reprinted in Singer [2002b] pp.145-156. (本文中の頁はリプリントの方の頁を示している。)
- [1973] "The Triviality of the Debate over "Is-ought" and the Definition of "Moral"," in *The American Philosophical Quarterly*, 10, pp.51-56. Reprinted in Singer [2002b] pp.17-26. (本文中の頁はリプリントの方の頁を示している。)
- [1975] *Animal Liberation*, New York Review/Random House. Revised by Pimlico, 1995. Further revised by Harper Perennial Modern Classics, 2009. (ピーター・シンガー (戸田清訳) 『動物の解放』改訂版、人文書院、2011年。本文中の頁はPimlico版の方の頁を示している。)
- [1979a] *Practical Ethics*, Cambridge University Press, 1st Edition.
- [1979b] "Unsanctifying Human Life," in John Ladd ed. *Ethical Issues Relating to Life and Death*, Oxford University Press, pp.41-61. Reprinted in Singer [2002] pp.215-232. (本文中の頁はリプリントの方の頁を示している。)
- [1993a] *How Are We to Live? Ethics in an age of self-interest*, Oxford University Press. (ピーター・シンガー (山内友三郎監訳) 『我々はどう生きるべきか：私益の時代の倫理』改訂版、法律文化社、1999年。)
- [1993b] *Practical Ethics*, Cambridge University Press, 2nd Edition. (ピーター・シンガー (山内友三郎+塚崎智監訳) 『実践の倫理』新版、昭和堂、1999年。)
- [1994] *Rethinking Life & Death: The Collapse of Our Traditional Ethics*, Oxford University Press. (ピーター・シンガー (榎則章訳) 『生と死の倫理：伝統的倫理の崩壊』昭和堂、1998年。)
- [1998] *Ethics into Action: Henry Spira and the Animal Rights Movement*, Rowen & Littlefield Publishers, INC.
- [2002a] *One World: The Ethics of Globalization*, Yale University Press and Text Publishing. (ピーター・シンガー (山内友三郎/榎則章監訳) 『グローバル化の倫理学』昭和堂、2005年。)
- [2002b] *Unsanctifying Human Life*, Edited by Helga Kuhse, Blackwell Publishing. (部分訳：ピーター・シンガー (浅井篤・村上弥生・山内友三郎監訳) 『人命の脱神聖化』晃洋書房、2007年。)
- [2009] *The Life You Can Save*, Picador.
- [2011] *Practical Ethics*, Cambridge University Press, 3rd Edition.
- Smith, Michael [1999] "The Definition of 'Moral'" in Jamieson [1999] pp.38-63.